

田原の道(二)

田原市街地までの道は、江戸時代の初め頃までは汐川に阻まれ大きく迂回していました。戦国時代、奥郡(おくごおり)渥美半島の先端をこのように呼ぶ)へは田原の神明社から二ツ坂を通り、山ノ寺(衣笠小学校南付近)、そして山すそ伝いに大久保までいっていたようです。現在そのルートが推定できるのは山ノ寺までで、それから西は不明です。

一方、江戸時代には清谷橋から国道の南側を通っていました。現在も旧道として残っています。明治23年の地図では、ほぼ江戸時代の道が辿れ、現在の国道が当時の道に近いことがわかります。

中でも興味深いのが、大久保から野田への道です。江戸時代の古文書(18世紀初)には「古来は東大久保ヨリ庚申池ノ西之沢へ登り大だわノ峯を越シ細法リへ下りかしわ崎ノナハテ通り保井村堂ノマへ江出ル」とあります。ここで言う古来とは戦国時代をさします。当時は大久保から山越えして野田



●野田側から見た「大だわの峯」

に至ったのです。長興寺の西には今でも庚申池がありますが「大だわの峯」の名は現在はなく、どこを指すかは分かりません。大久保の西山のどこかをこう呼んでいたのでしょうか。おそらく沢伝いに登り、運昌寺のあたりに降りていたようです。普通に考えれば険しく、馬などを使った物資輸送も困難な山道よりも、平坦な道の方が楽と思われそうですが、西山のすそ伝いに迂回するより、山越えのルートが当時の交通事情として理にかなったものだったのでしょうか。野田から宇津江へは、戦国時代には西円寺のあたりから馬草に抜け、川を渡り海岸伝いのルートをとっていました。その後江戸時代には、宇津江坂と呼ばれる峠を越したルートになりました。

現在は車両を使った陸路が私た

ちの主要な交通路ですが、海路の重要性も見逃してはいけません。陸路では行き止まりになっている渥美半島も、中世以前は都の文化がいち早く伝わる先進地でした。古代で言えば、むしろ尾張地方よりも、伊勢から海を渡って文化が直接伝播していたのです。ですから奥郡などという言葉は、江戸時代以降の幕府の街道整備政策、つまり陸路重視に起因する偏見の言葉に違いありません。

道は、時代の要請により移り変わります。陸路も海路も重要なものであり、また近い将来、空路がもっと身近な道になるかもしれません。



●奥郡への道(おおよそを示しています)

▽田原町博物館 ☎22局1720

今月の表紙

COVER STORY

日本の甲冑の代名詞とも言える鎧兜は、時代によってその形態が異なります。乗馬一体が基本だった平安鎌倉時代の武將は、華麗な大鎧と星兜を身にまといました。それが室町時代になると、歩兵が動きやすい胴丸、腹巻が流行し、兜も簡素なものとなりました。そして、長篠の合戦以後、戦に鉄砲が用いられるようになると、今度は鉄板製の当世具足が普及しました▼どの時代にも共通していたのは、鎧兜を身にまとう、武士たちの誇りでしょうか▼我々がサッカー日本代表も、現代の鎧と言わなければならないのは、誇り高き試合を期待しましょう▼端午の節句に鎧兜を飾るのは、それが身の安全を守る象徴だからだそうです。(写真・5月5日、田原城趾で鎧兜の試着会が行われ、たくさんの子供たちが参加しました)

【人口と世帯数】

総人口	36,829人		
男性	18,801人		
女性	18,028人		
世帯数	11,511世帯		
出生	29人	死亡	15人
転入	155人	転出	154人
増減	15人		

(平成14年5月1日現在・増減は4月中)

【行政面積】 82.86 km<sup>2</sup>

(平成11年10月1日現在・国土地理院調べ)